

「今日の説教」 2012年4月22日 明治学院教会(271)

(このプリントは毎週作っているものです。)

「交わりをもつために」

牧師 岩井健作

聖書 ヨハネの手紙Ⅰ 1章1節-4節

- 1、 今日から、何回かヨハネの手紙Ⅰを学びます。新約聖書の中では「公同書簡(ヤコブ、ペトロⅠ、Ⅱ、ヨハネの手紙、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、ユダの手紙、の七つ)」と集合的名称で呼ばれている(後197ごろから)ものの一つです。特定の宛先はありません。普遍的に妥当(公同)する信仰の証言が含まれているので「公同書簡」と呼ばれています。ヨハネの第一の手紙は、キリスト教徒として相応しい生活を送るようにという勧告と、教会の中に現れた「異端者」に対抗する指針を内容としています。異端者は「受肉の事実性{イエスの歴史性}」を否定し、キリスト者がなおも罪を犯すかもしれない可能性をも否定します(仮現論{イエスは先在の神の子が仮の姿をとってこの世に来たものとみなす。)、また当時のグノーシス{覚知主義}の流れの影響下にある考え方)。初期キリスト教史上初めて信仰者の生活における罪について論じたものです(3:6-9)。罪を犯したときは罪の告白によって赦しの体験が与えられる(1:7、2:2、5:14-16)。また「ヨハネ福音書」と用語と思想が近いので同一サークルに属する者が著者であったとされ、「ヨハネ」の名がつけられています。執筆場所はシリアカエフェソの周辺で、執筆年代は紀元90-110年ごろです。
- 2、 1章1-4節の書き出しはヨハネ福音書の序文と似ています。ここの中心命題(ブルトマンによる)は3節の「わたしたちは・・・あなたがたにも伝える・・・」という文章です。伝えられる内容にはヨハネ福音書の鍵語が出てきます。「言(ロゴス)」「命」「証」「御父」「御子」です。この手紙は、いわゆる「異端」を論駁しているのですが、相手を「あなたがた」と呼んでいるところが注目すべき所です。異端ですから、白黒をはっきりさせて、切って捨てるというのが普通ですが、そのような外科手術的なやり方ではないのです。「交わりをもつために」(3節)対話をし、論議をしようというのです。もちろんはっきりすべきところはきつい言い方をしています。「偽り者とは、イエスがメシヤであることを否定する者でなくて誰でありましょう。御父と御子を認めないものは反キリストです」(2:22)。しかし、「交わりをもつために」共通基盤を「わたしたちの交わりは御父と御子イエス・キリストとの交わりです」(3節)と言います。論敵「あなたがた」は決して「反キリスト」ではありません。イエス理解の論点の置き方の違いです。イエスを「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたもの」(現在完了形の動詞)と捉えるのは「わたしたち」です。「あなたがた」はイエスを仮現論に従って抽象的、観念的に捉えるのです。だが「信仰とは、歴史の中で具体的に捕らえることができるような生活として現れるもので、きわめて現実的なものであり、実証性をもっている。」(飯清)。信仰に関しては現実と観念がひっくり返してはならないのです。現実とは体験が共有化され経験となって交わりの基盤となるものです。観念は同じであれば観念集団が出来、交わりは生まれません。交わりは、個別に違う経験が基盤になって生まれるものです。教会はイエス(・キリスト)との出会いの多様性があるからこそ、「教会」なのです。個人の経験の違いが「証し」として語り合われ、聞かれるところに、教会の豊かさがありましょう。